

# 『あるアスリートの告発』

監督：ボニー・コーエン  
2020年／アメリカ／104分



予告

Netflix 映画『あるアスリートの告発』  
独占配信中

## 社会を旅する シネマ

きつと もっと 近くなる  
きつと もっと 知りたくなる

2016年、リオデジャネイロオリンピック会期中に、米国体操連盟が選手への性的暴行を黙認している可能性があるという衝撃の報道が流れた。多くの体操教室から告発があがっていたが、連盟が地方当局へ通報する義務を果たさず、問題があったコーチに教室を異動させていたのだ。告発があったコーチは54人にも及ぶ。

このニュースを報じたインディアナポリス紙に報道後すぐ3人の元／現女性体操選手から連絡が入る。ニュースを受けて「自分が経験した“あれ”も性的暴行だった」と気づいたのだ。暴行をしたのはコーチではなく代表チームのドクターを29年務めるラリー・ナサール医師。治療という名の下に陰部に触れたり、膣に指を入れたりしていた。同紙はさらに多くの被害者がいるだろうと予測し調査を進めていく。また、3人の中のひとり、元オリンピック選手のジェイミーはナサール医師を提訴する。

被害に遭った3人やその家族のインタビューから浮かび上がってくるのは、オリンピックを筆頭に性暴力が起きやすいスポーツ界の構造だ。朝から夜まで練習漬け。合宿所のような閉鎖的な空間で過ごすことも多い。コーチは怒鳴るなどして絶対的支配関係で指導する。精神的・肉体的虐待が日常だ。だから性的暴行を受けても従順になってしまったり、そもそも暴行であると認識できなかつたりするのだ。

さらに厄介なのは、厳しい練習環境の中でナサール医師は唯一優しい存在だったことだ。ユーモラス

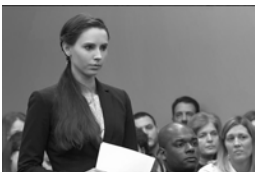
## スポーツ界の頂点に存在する 性暴力を生み出しやすい構造

アーヤ藍

なことを言って笑わせてくれたり、お菓子をくれたりする彼の治療の時間を、楽しみにしていたという選手もいる。客観的に見ればグルーミングだが、緊張と暴力に満ちた閉鎖空間にいる選手たちがそれに気づくのは困難だろう。

試合に出たい選手たちと、その決定権を握るコーチや連盟側との権力勾配も性暴力をはびこらせた原因のひとつだ。声を上げたひとり、マギーは被害を受けた直後に親やコーチに相談していた。しかし連盟側から適切に対処するからと言われ、公表せずには待っていたのだ。連盟側を怒らせたくないから……。しかしマギーはその後、代表選手どころか控えの選手にさえ選ばれなかった。何かしら連盟の力が働いたのではと思わずにられない。

アメリカでは13歳未満の子どもに対する性犯罪は「第一級性犯罪」とされる。最終的にナサール医師の裁判では125人が実名で証言し、最大175年の禁固刑となった。性暴力に対して「寛容」とされる日本ではそこまでの刑罰は望めないだろう。性的暴行は消えることのない心の傷をつけ、尊厳を奪い、選手としての「命」さえも奪いうる。それは重い罪ではないのだろうか。ちなみにマギーは大学で、優しいコーチのもと体操を心から楽しめるようになった結果、全米体育協会でも再びチャンピオンに輝いている。暴力的な指導のあり方の見直しもさまざまな観点から求められるだろう。



あーやあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題にかかわる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』(春眠舎)。

